The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	院政期漢詩文の研究
Author(s)	仁木, 夏実
Citation	大阪大学, 2004, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/45708
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【3】

氏　　名	仁木夏実（にき なつみ）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　１９００９　号
学位授与年月日	平成 16 年 9 月 24 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 文学研究科文化表現論専攻
学　位　論　文　名	**院政期漢詩文の研究**
論文審査委員	（主査） 教　授　後藤　昭雄 （副査） 助教授　荒木　　浩　　教　授　梅村　　喬

論文内容の要旨

申請論文は第１篇「院政期儒者論」、第２篇「影前の院政期」、第３篇「東大寺図書館蔵『遁世述懐抄』の研究」の３篇で構成されている。すなわち、文学制作を担う人、文学制作の場、その資料の三点を軸として、平安時代後期、院政期の日本漢文学の世界の解明を目指した論文である。

第１篇、第１章「院政期儒者論序説」で「儒者」という語を当時の資料の用例の検討からその意味を規定し、従来の研究の欠落を補う視点として、侍読、東宮学士などの天皇近侍の儒職に着目することの必要性と有効性を述べる。これを導論として、以下の三章で院政期漢詩壇の主な担い手となっていた藤原氏の日野家、式家、南家の藤原三家を対象として各論を展開している。日野家、南家については藤原実光、藤原永範を選び、その伝記研究を行いつつ、それぞれが日野家、南家の儒家としての家格の確立に果たした役割を論じている。式家の儒者については伝記研究の蓄積があるので、別の視点を導入して、式家儒者に当時の政治権力者との結びつきにおいて、二派があることを明らかにしている。

第２篇は４章から成る。第１章は藤原忠通の漢詩集『法性寺殿御集』所収の、白居易の「新楽府」を対象とした連作の問題点の指摘と文学史への新たな位置付けを目指した論である。第２章は好学の公卿藤原頼長が自邸で行った、孔子の画像の前で経書を学ぶ会に関する研究で、従来言われてきたような釈奠を模倣した行事ではなく、仏教的要素の強いものであったと指摘している。第３章は源通親の漢文「模香山擬草堂記」を論じる。通親が京都鳥羽に白居易に倣って草堂を建て、高倉院供養の法会と詩会を行った記録であるが、これを精読して、その執筆時期を確定し、通親にとっての「記」執筆の意味、「記」に見られる白居易信仰の様相などを論じている。付章は好文の天皇、高倉天皇を中心として形成されていた詩壇についての研究である。諸資料を収集して、まず高倉天皇詩壇と呼びうるほどの文事が行われていたことを明らかにした。ついで、そこで行われた文学的行為を解明して、それが漢詩文の分野のみにとどまらず、和歌研究にも繋がりを持つものが含まれることを指摘して、後代の後鳥羽院、順徳院らの文学活動にも影響を与えたことを述べる。

第３篇は鎌倉時代初期の東大寺を代表する学僧宗性によって収集された資料『遁世述懐抄』に関する研究である。三通の書状と五首の漢詩を集めたものであるが、第１章で全体の概観および個々の文献の解題を行い、第２章、第３章で、所収の漢詩を詳細に読解し、その文学史上における意義を論じている。

論文審査の結果の要旨

本論文の評価すべき点はいくつかあるが、論の順序に従ってあげれば、まず従来の研究に対する批判的視点を持つということである。従来の院政期漢詩文の研究は、当然のことではあるが、専ら現存する資料、『本朝無題詩』『本朝続文粋』『法性寺殿関白御集』などの作品を対象として行われてきた。その結果、藤原忠通とこれと深い結びつきを有する藤原式家の儒者たちに関する研究ばかりといってもよい状況にあった。これに対して、申請者は多く現存する当時の公家の日記を精読することで、式家儒者とは違った日野家、南家の儒者の位置、役割を発見し、論じている。その結果、式家儒者に偏重した従来の研究を是正する視点が提示された。また、この視点を獲得し得た公家の日記を中心とする歴史史料への着眼およびその精読という点は、評価すべき第二の点である。これによって、第１篇の諸論、第２篇の第２章の基本的視点を見出しており、また細部についても新たな事実を指摘している個所が少なくない。歴史史料以前に考察の直接の対象である漢詩文についても、従来の研究に対する批判的視点を持ちつつ、丁寧な読解を加えて成果を挙げている。第２篇の第１章、第３章などがそれである。個別の論としては第３篇第２章の信阿論、第２篇付章の高倉院詩壇に関する論を評価できる。前者は文学史的に重要な位置を占めながら、不明な部分も多かった信阿について、新発見の資料を用いて論じたもので、信阿の研究に新たな刺激を与えるものとしてすでに学界の評価を得ている。また後者は漢文学の分野にとどまらず、和歌史研究とも関連して、文学史的に重要な視点を提示したものといえよう。なお、第１篇、第２篇のほとんどの論には関連する年表が付されているが、これも労作として評価できるものである。

ただし、第２篇の諸論を「影前の院政期」という総題で括っているが、これは表現としても熟さないものであり、総題としてはたして適切なものであるかという疑問があるが、然したる問題ではない。

沈滞気味の平安後期日本漢文学研究に寄与する所の大きい清新な論文である。よって博士（文学）の学位を与えるにふさわしいものと認定する。